

グアテマラのマリンバ

The Marimba of Guatemala

富 田 晃^{*}
Akira TOMITA^{*}

要旨

アフリカの黒人たちが新世界に伝えたマリンバはキリスト教布教とともにグアテマラの先住民のあいだに広がった。そしてヨーロッパのクラシック音楽やアメリカのジャズと呼応しながらグアテマラの「国民楽器」として広く人々から親しまれるようになった。グアテマラ・マリンバはまさに人類の地球大の文化のやりとりのなかで生まれ育った楽器なのだ。本稿では、グアテマラのマリンバの歴史、社会背景および楽器製作について概観する。

キーワード：グアテマラ、マヤ、文化伝播、都市文化、楽器製作



イントロダクション

グアテマラ滞在中のある日、結婚披露パーティーに招かれた。鉄錨が付いた重厚な扉にはライオンを型取った鋳物の呼鉄があり、訪問客を確認する小窓がとりつけられている。古都アンティグア市にはスペイン植民地期の風情を伝える街並みがつづく。

重厚なマホガニーの扉を越えるとパティオと呼ばれる中庭があり若い二人の門出を祝う人々が集まっている。マリンバの演奏に合わせ、まず、純白のウエディングドレス姿の花嫁がその父親と頬をよせて踊る。そして人々は立ち上がり交代で花嫁・花婿と踊る。

二台のマリンバを相手に、スーツ姿の紳士たちが見事なばちさばきを披露している。良質な熱帯材ローズウッドが深くまろやかな音色を醸し出す。良く聴くと

ピーンピーンというしびれるような音が含まれていてなんとも愉快だ。七人のマリンバ奏者は、まるで一人が十四の手を持ったかのように完全に一つの音楽となって軽快に演奏している。一糸乱れぬ息づかいとはまさにこのことだ。

マヤの音楽と割れ目太鼓トゥン

メキシコの南に位置し、ベリーズ、ホンジュラス、エルサルバドルと接する中米のグアテマラ共和国は人口約1,400万人。公用語は他のラテンアメリカ諸国同様にスペイン語である。今日まで続くマヤ文化の歴史と風光明媚な自然、そして温暖な気候に恵まれたこの国で、まろやかな響きを醸し出すマリンバは人々から「国民楽器」として愛されてやまない。

かつて、グアテマラを含むメキシコ南部から中央アメリカ北部にかけてマヤ文明が開花した。古代マヤは歴代の王のもと密林の中に巨大な石の都市を築き複雑で独特な文字と精緻な天文暦を発達させた。しかしマヤ文明は10世紀にはいと忽然と崩壊し都市は放棄された。その原因は未だ謎にまつまれている。当時の音楽を現在直接聞くことはできないが、古代マヤの遺跡からは土器製の縦笛、鈴、オカリナ、ラッパ、吹奏用のホラガイ、打楽器として用いていた亀の甲羅といった楽器類が出土している。また、祭礼用の土器の表面には、太鼓やマラカス、丸太をくり抜いて作った割れ目太鼓なども描かれている。しかし、コロンブス以前

^{*} 弘前大学教育学部美術教育講座

Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

のマヤ世界にはマリンバはまだなかった。

マヤの王権と都市とが消滅した後も、グアテマラにはマヤ系の言語を話す人々が先祖からの生活を守りながら暮らしてきた。現在もグアテマラ国民の半数近くがマヤ系の先住民で、鮮やかな民族衣装を身につけて暮らす彼らはこの国の文化を特徴づけている。そして彼ら先住民が伝統的な宗教とともに割れ目太鼓トゥンを伝えていたこと、そしてこのトゥンの材料であり、叩くと良く響く良質なローズウッド材やマホガニー材が自生していたことが、後にマリンバがこの地に根づく素地となった。

アフリカそして先住民とキリスト教

1492年にコロンブスが新世界に到達しヨーロッパによる征服の歴史が始まった。スペイン人たちは、新世界の先住民たちを驚愕させるため彼らの知らない馬やアフリカから連れてきた黒人を遠征軍の先頭にたて、次々に先住民の村々に攻め入り、支配下においていった。そして軍事的征服と宗教的征服を不可分なものとしたスペインは先住民の村の中心に教会を建設しキリスト教の布教を押し進めていった。

こうした植民地期初期、1545年の『サンタルシアの先住民の改宗』に最初のマリンバに関するスペイン人による記述がある。

現在もグアテマラ高原にはグアテマラ・マリンバの原型であるマリンバ・テコマテ（ひょうたんのマリンバ）という素朴なマリンバが先住民たちのあいだで伝えられている。このマリンバ・テコマテはローズウッド材の音板の下に共鳴用のひょうたんを並べた木琴で、ひょうたんの下部には穴が開けられ、そこにブタの腸の膜が張られている。この膜がビリビリという一種の雑音的效果音を生み出すのである。グイシシル材のマレット（ばち）の先端にはこの地に自生する天然ゴムが巻き付けられている。

このマリンバ・テコマテは、グアテマラとは大西洋をはさむ西アフリカの木琴バラフォンと非常に良く似ている。西アフリカの木琴バラフォンにはやはり共鳴用のひょうたんがとりつけられ、雑音的效果を出すためクモが卵を保護する薄膜が張られている。ただし、西アフリカのバラフォンが主に五音階であるのに比べグアテマラのマリンバ・テコマテはいわゆるドレミファソラシドの七音階で、あくまでヨーロッパ音楽の音階である。それはスペイン人によるキリスト教布教活動との関係をあらわしていると考えられるべきだろう。

現在、グアテマラ・マリンバの起源を証明する明か

な資料をわれわれは持たない。しかし、スペインによる植民地期初期の十六世紀に西アフリカから連れてこられた黒人たちが伝えたものとする説が有力だ。ただしグアテマラに輸入された黒人奴隷の数は少ない。そして、グアテマラでマリンバを最初に受け入れたのは、地方の山間部に暮らすマヤ系先住民であったことは興味深い事実だ。ちなみに、先住民への平和的改宗活動で知られるスペイン人聖職者ラス・カサスと彼とともにやってきた黒人がグアテマラにマリンバを伝えたという説もある。またグアテマラで古くから伝えられているマリンバという単語自体が、アフリカ起源を示している。西アフリカのバンツー語では、「リンバ」は木の棒を意味し、「マ」が多くの数を表す接頭語であり、「マリンバ」は、多数の木の棒を意味しているのだ。

いずれにしろ、マリンバは植民地期初期の200年間にグアテマラ高原のマヤ系先住民たちの間にしだいに広がっていった。それは、マリンバがもつ独特な甘い響きが温暖なグアテマラの風土に住む人々の感受性によく合っていたからであろうし、そもそもトゥンという割れ目太鼓を奏でていた先住民にとって木琴マリンバを受け入れは難しいことではなかったからだろう。そして、グアテマラの人たちがあくまで、西アフリカのバラフォンとおなじビリビリという粗雑音にこだわったことは興味深い。

またマリンバはさまざまな改良も加えられるようになった。せいぜい三オクターブほどだった初期のマリンバは次第に音域が広がり、一台のマリンバを数人で演奏する大型のマリンバも現れた。共鳴用のひょうたんは木製に改良された。そして、音板の下端にミツロウをつけることにより音程を半音下げて、移調を可能にするように工夫されたものも現れた。昔も今もマリンバ演奏は男たちの仕事だ。

グアテマラの「国民楽器」そして世界のマリンバへ

それまで山間部に暮らす先住民たちの土俗的な楽器として、都市部に住む白人やラディーノ（白人と先住民との混血）たちから蔑まれていたマリンバは、20世紀に入ると一気に「国民楽器」としてグアテマラ国民全体から圧倒的人気を得るようになった。この「マリンバ革命」のきっかけは19世紀末に、それまでのピアノの白鍵にあたる部分しかなかったマリンバ・センシーリャ（簡素なマリンバ）から、黒鍵の部分を加えたマリンバ・ドブレ（二段のマリンバ）が発明されたことに始まる。このマリンバ・ドブレはマリンバ・

フォルマル（正式なマリンバ）として発達し、長さ二メートル半、低音から高音まで六オクターブにわたる広音域をカバーする特大のマリンバ・グランデ（大きなマリンバ）とそれより一回り小さい音域四オクターブ半のマリンバ・テノール（中音域のマリンバ）の二台のマリンバを、それぞれ四人と三人の合計七人の奏者により演奏するスタイルに定着していった。

こうしてピアノのように十二音階に調律されたマリンバ・ドブレによって、ベートーベンに代表される複雑な西洋音楽が演奏可能となった。そして、ヨーロッパ文化に通じる首都グアテマラ・シティーの白人社会ではクラシックの演奏会に、ピアノやバイオリンとともにマリンバの演奏も加わった。また西洋クラシック音楽の伝統に基づいたグアテマラ人によるオリジナルのマリンバ曲も数多く生まれるようになった。こうした芸術音楽としてのマリンバ音楽はマリンバ・クラシカ（クラシックのマリンバ）と呼ばれ20世紀初頭から国立音楽アカデミーを中心に発達した。

一方、20世紀初頭から中頃にかけて、都市部の庶民たちを中心にパーティー用のダンス音楽としてマリンバ・ポプラー（大衆のマリンバ）がアメリカのジャズ音楽の盛栄と呼応しながら花開いた。マリンバ・ポプラーはグランデとテノールの二台のマリンバにドラム・セットとコントラバスを加えたマリンバ・プーラ（純粋なマリンバ）という中編成と、さらにサクソ、トランペット、トロンボーンなどを加えたマリンバ・オルケスタ（オーケストラのマリンバ）という大編成とがある。またワルツ、マズルカなどヨーロッパ起源の舞踏音楽の他スイング、フォックス・トロットなど当時のアメリカの人気リズム、さらにはクンビア、メレンゲ、ボレロなどラテンアメリカのさまざまな音楽要素を取り入れた。こうしてマリンバ・ポプラーは、結婚式や祝賀会などのパーティーでのダンス音楽として受け入れられ、ついにはグアテマラ国民全体から愛されるようになったのである。また、グアテマラ独自の三拍子系のダンス音楽ソン・グアテマルティコが常にマリンバ・ポプラーのレパートリーの中心であったことを忘れるわけにはいかない。

このようにマリンバがグアテマラ国民に広く親しま

れる楽器として成長するとともに20世紀初頭から次々にマリンバ・グループがアメリカに演奏旅行をするようになった。それはクラシック、ポピュラーに限らずアメリカの音楽界全体に強い影響を与えた。こうしてアメリカで生まれたクラシック用のマリンバが世界のオーケストラで使われるようになり、ジャズ・ポピュラー音楽界にはバイブラフォンが生まれた。

現在もグアテマラにおけるマリンバの「国民楽器」としての地位は揺るぎない。グアテマラ全土にはおそらく数百のマリンバ・グループがあるだろう。各村々でおこなわれる年に一度の聖人祭には、それぞれの村に伝わるマリンバがキリスト教の聖人に奉納される。そしてグアテマラ人の人生の節目を祝うさまざまな通過儀礼、つまり洗礼式、誕生日、十五才の成人式（女子）そして結婚式などにもマリンバは欠かせない。国の各省庁や各地の市役所、各地区の軍隊もそれぞれマリンバ・グループを持ち、役所のホールや公的行事のレセプションなどでその芸を披露する。また毎日、家庭で、職場で、市場で、そしてバスの中で、昼食時と夕食時に流れるマリンバのラジオ番組は皆が聴いている人気番組だ。

アフリカの黒人たちが新世界に伝えたマリンバはキリスト教布教とともにグアテマラの先住民のあいだに広がった。そしてヨーロッパのクラシック音楽やアメリカのジャズと呼応しながらグアテマラの「国民楽器」として広く人々から親しまれるようになった。グアテマラ・マリンバはまさに人類の地球大の文化のやりとりのなかで生まれ育った楽器なのだ。

文献

Carlos R. Asturias G.

Verdadera Evolución De La Marinbah Maya, Artemis (Guatemala), 1994

César Pineda del Valle

Antología De La Marimba En America, Artemis (Guatemala), 1994

Enio Betancourt Fioravanti

Marimba, Artes Gráficas(Guatemala), 1985

(2013. 8. 5 受理)



1. 古代マヤ文明の代表的な遺跡ティカル。メキシコ南東部～ベリーズ～グアテマラ～ホンジュラスにかけて、かつて、いくつもの都市国家が栄え、そして崩壊していった



4. アティトラン湖畔の典型的なマヤ系先住民の村
サンタ・カタリーナ・パロポ（ソロラ県）



2. グアテマラ上空からアティトラン湖とサン・ペドロ火山を見下ろす



5. グアテマラの高原地帯では、後帯機を用いた手織物が盛んだ。女性たちが色鮮やかな民族衣装を織る
サンタ・カタリーナ・パロポ（ソロラ県）



3. 「世界一美しい湖」といわれるアティトラン湖の夕景。
木彫りの舟で漁をする



6. グアテマラの各村では年に一度の守護聖人の祭が行われる。
サンタ・ルシア・ウタトラン（ソロラ県）



7. 聖人祭での「征服の踊り」。マヤ文化とスペインから持ち込まれたキリスト教文化とが習合したさまざまな習俗や祭礼がある
 サンタ・ルシア・ウタラン（ソロラ県）



10. トランペットやサックスとともにマリンバが演奏されるチチカステナンゴ（キチェ県）



8. チチカステナンゴ（キチェ県）の日曜市。教会前では香が焚かれ、周辺各村から集まった農産物が売買される



11. ひょうたんの共鳴筒と薄い音板をもった原始的なマリンバ
 チチカステナンゴ（キチェ県）



9. 葎の縦笛と太鼓を奏でながら歩く
 チチカステナンゴ（キチェ県）



12. マヤ系キチェ族の代表的な霊場パスクアル・アパフの丘。先スペイン期からあるという人面石に香や花、生贄が捧げられる
 チチカステナンゴ（キチェ県）



13. トトニカパンのマリンパ (トトニカパン県)



16. 古都アンティグア (サカテペケ県)。1773年、大地震により、現在のグアテマラ・シティに移るまで、ここが首都だった



14. このマリンパ・センシーリャでは、音板下に蜜ロウの塊を紐で吊るし、これを音盤につけると半音下げて、さまざまな音階ができるようになっている
トトニカパン (トトニカパン県)



17. 結婚式にて
アンティグア (サカテペケ県)



15. マリンパを背負って村を歩く
トトニカパン (トトニカパン県)



18. 教会の礼拝でもマリンパが演奏される
アンティグア (サカテペケ県)



19. マリンバ・ブーラ（純粋なマリンバ）のグループ。
六オクターブのマリンバ・グランデを4人で、四オクターブ半のマリンバ・テノールを3人で、あとドラム・セットとコントラバスを加えた9人編成だ



22. ホンジュラスの警察音楽隊



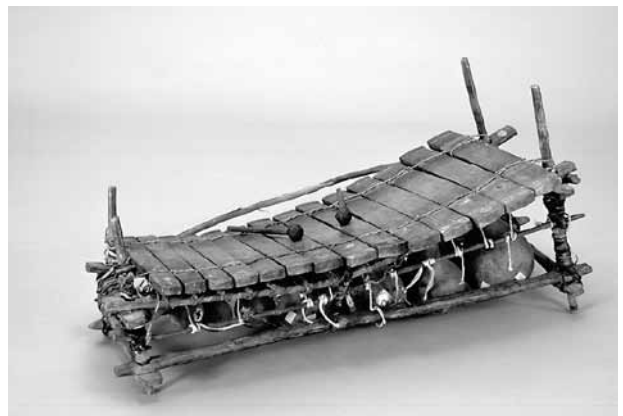
20. グアテマラのマリンバの共鳴筒には、穴があり、蜜ロウで盛られた上にブタの腸の膜が貼られている。この膜がビリビリという愉快的音を出す



23. 丸太をくり抜いて作られた割れ目太鼓トウン



21. オアハカ市にて(メキシコ)。中米のマリンバ文化圏は、かつてのマヤ文明の影響圏とおおよそ一致し、北はメキシコのオアハカあたりから、ベリーズ、グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグアそして南はコスタリカ北部あたりまでだ



24. 中央アフリカ、コンゴ（旧ザイール）の木琴パラフォン。ひょうたんの共鳴筒やビリビリという粗雑音を加える仕掛けなど、大西洋をこえて中央アメリカ、グアテマラの先住民に伝えられているマリンバと、とてもよく似ている

マリンバの製作過程



①マリンバ職人のホルヘ・アビラ・モラレスさんと家族
テハル（チマルテナンゴ県）



④鍵盤の裏側をノミなどを使ってえぐるように削る。この作業によって倍音が加わりマリンバ独特の丸みのある音色になる



②音板には、高音部にはローズウッド材、中音～低音部はマホガニー材がつかわれる。よく乾燥させた木材を罫引きを使って木取る



⑤紙ヤスリをつかって音板を丁寧に仕上げる



③音の波の節目にあたり振動を妨げない位置に紐を通すための穴をあける



⑥マリンバの丸い音色は、裏側のえぐられた削りとともに、共鳴筒によって得られる。共鳴筒は、マホガニー材の一種セドロでつくられている。角材を流線型に削り、さらに4枚の部材に切り分ける



⑦鉄パイプでつくったローラー式のコテを火にかけて熱くする



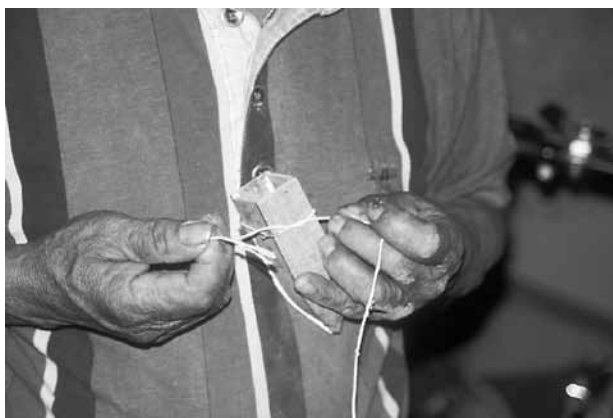
⑩共鳴筒に息を吹き込んで、鍵盤の音程と同じであるか、確認する



⑧熱したコテを、水で湿した部材にあてて曲面に成形する



⑪共鳴筒の長さを調節して、音の高さを調節する



⑨紐と接着剤を使って4枚の材を組み立てる



⑫共鳴筒の前で音板を叩き、うまく共鳴するか確認する



⑬ 共鳴箱の底にあたりに穴をあけ、蜜ロウで盛り上げた上にブタの腸の膜を貼る



⑭ 大型のマリンバは組み立て式になっていて、箱、脚、音板、共鳴筒などに分解できる



⑮ ゴムの木から板材を切り出し放置しておくで表面に沁み出た樹液が固まり、ゴムの膜ができる。これをガイシシル材の木の棒に巻きつけてマレットをつくる